07/03/17

人、街に生きる

東大学生寮・同志会 ④

(上)「経営者には宗教的素養が必要」と語る金井さん＝千代田区内で
(下)メガバンクから地銀に転じた荘内銀行の町田さん＝同区内で

企業でモラル追求

日立製作所で社長、会長を十四年務め二年前に相談役になった金井務(七〇)は東大のキリスト教学生寮「同志会」に命を救われた。大学三年のとき肺結核になり、高価な薬が手に入らず途方に暮れた。

「厚生省の先輩が薬の面倒を見てくれた。面識もないのに同志会の後輩というだけで助けてくれた」。同志会のつながりがなかったら、今日の金井は存在しなかったはずだ。

一九五八年、工学系大学院を卒業した金井は日立に入社する。入社二十三年で社長コースといわれる日立工場長を務め、トップに上り詰めた金井の会社人生は順風満帆そのものに見える。

社長になって感じたのは「会社の品格は所詮(しょせん)、社長の品格を超えられない」ということだ。

「会社を運営していく上で、天の道を実現する誠と、反対意見をいれる寛容さは欠かせない。経営者にも宗教的素養は必要で、それを同志会で学んだと思う」

金井がトップに立ったのはバブル崩壊が始まった直後で、日立の経営は困難の連続だった。

「米GE会長だったウェルチから、ウソでもリストラをやると言えば株価が上がると言われた。しかし、従業員も株主と同じ会社のステークホルダー(利益共有者)。リストラそのものは否定しないが、再就職先を考える愛が必要だ」

リストラや不採算部門の切り捨てなど、情け容赦のない経営がもてはやされるグローバル競争の時代。金井の経営観は際立つ。

「日立は、日本の社会が必要とする事業なら苦しくてもやる。企業は海外に行けるが、従業員はそうはいかない。若い人が将来に希望を託す会社でなければならない」

六二年卒寮の町田睿(さとる)(六九)は当時、預金量日本一の富士銀行(現みずほ銀行)に入行した。

しかし、秋田で高校教師だった父が「カネは汚い。それを扱う職業に就くとは」と残念がった言葉が「頭を離れなかった」という。

下町の支店に配属され、債務者が自らに生命保険をかけ自殺するような現実を知り「おやじの言うことは正しい」と思ったことも。

「二十年ぐらい悩む日々が続いた」。しかし、従業員組合の専従役員を経験し、初めて「みんなのために働く」生きがいを感じた。

その後、業務や人事部を経て、総合企画部長として本部各部を統括する立場になったころ、世はバブル経済が花盛りだった。

「収益至上では危ない。質を重視する経営に戻そう」。転換を呼び掛けるが、時は既に遅かった。バブルが崩壊し、不良債権の急増を抑えることはできなかった。

代表取締役常務を最後に九四年山形の荘内銀行に転出し、頭取となる。預金量は富士の百分の一。

「メガバンクは高い収益を求め世界のどこへでも行く。地銀は地域が廃れれば行き詰まる。地域に役立つのは本当にやりがいがある。金融の倫理もそこに生まれる」

市場主義万能の時代に企業のモラルを求める金井と町田。そこには、同志会時代に培われた志が息づいている。(文中敬称略)

文・清水美和　写真(上)・中西祥子　写真(下)・河口貞史